

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13072

研究課題名（和文）「文豪」夏目漱石像と岩波文化の研究：小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を用いて

研究課題名（英文）A Study of Natsume Soseki, the "Great Man of Letters" and Iwanami Culture: Using Materials Related to the Compilation of the Complete Works of Soseki, Formerly Owned by Isamu Kobayashi

研究代表者

服部 徹也 (Hattori, Tetsuya)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：80823228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：岩波書店の決定版『漱石全集』の編纂過程の資料を撮影し、翻刻・注釈を付し、データベース化することが完了した。これにより全集編纂にかかわって漱石関係資料がどのように岩波に提供され、資料が選別され、本文が決定していったのかを具体的に追うことができるようになった。今後の展望として、森田草平や小宮豊隆ら関係者の全集編纂に関する書簡を翻刻しデータベース化することで、全集編纂の動向を複数の視点から描き出していくことが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文豪夏目漱石、文化的教養を重んじる岩波書店というイメージがどのように形成されていったのかを考えるうえで、没後すぐに刊行され現在までリニューアルを重ねながら継続されてきた『漱石全集』の編纂は重要な手がかりとなる。厳密な校訂を強調し、総索引を付すなどゲータラ外国の文豪の全集にも匹敵する構成をそなえ、小説だけでなく俳句や日記書簡などを収録することで、東洋と西洋の文化を融合させた文豪漱石という作家像を書籍そのものが体現するように『漱石全集』はデザインされてきたのだ。

研究成果の概要（英文）：We have completed photographing, reprinting, annotating, and compiling a database of materials related to the compilation process of Iwanami Shoten's definitive edition of Soseki Zenshu, the Complete Works of Soseki. The database allows us to follow the process of how the materials related to Soseki were provided to Iwanami, selected, and the text of the book decided upon. As a future prospect, it is hoped that the letters of Morita Souhei, Komiya Toyotaka, and others involved in the compilation of the complete works will be reprinted and compiled into a database to illustrate the trends in the compilation of the complete works from multiple perspectives.

研究分野：近代文学研究

キーワード：夏目漱石 岩波書店

## 1. 研究開始当初の背景

従来、漱石の学問的著作『文学論』は失敗作とされるか、現代文学理論の先取りとして過大評価されるかの両極端な評価を受けていた。研究代表者は『文学論』の漱石没後の受容を調べていくうちに、1925年前後、1935年前後に国内外で『文学論』へ言及する作家が多いことに気づいた。これは、1924年版・1935年版『漱石全集』刊行に連動する現象と考えられた。時代背景からすれば、プロレタリア文学の隆盛により既存の高級芸術としての近代文学イメージが揺らぎつつある中、その崩壊を防ぐために何度も呼び出されたのが「学者かつ作家である漱石像」だったのではないかと考えた。しかし、宣伝戦略の内実は公刊された文献からでは立証できなかった。そこで、『漱石全集』の監修に携わった小宮豊隆や英文学者たちの言説を含めて、1924年版・1935年版という二つの『漱石全集』編纂過程を内部資料から分析することを着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、出版が大衆化・廉売化する1930年代に、漱石と岩波書店が、いかにして学問の権威をまとい、高級な文化というイメージを形成しえたのかを解明することである。そのために、岩波書店内部資料(岩波茂雄旧蔵、のちに小林勇が所蔵)のうち、1935年版『漱石全集』の編纂過程を記録した資料の分析を行い、編集意図や編集体制の実態解明を試みる。この決定版全集は小宮豊隆が実質的に監修者となり、岩波書店員による綿密な本文校訂が加えられたほか、各巻には小宮による作品解説が附され、全巻を横断的に検索することができる総索引が付属するという、『漱石全集』の歴史のなかでも特筆すべき転換点にあたる。

大衆読者が登場して以降、とくに改造社の『日本現代文学全集』(円本)ブーム(1926年～)、岩波文庫創刊(1927年)、岩波新書創刊(1938年)に相前後する1924年版・1935年版という二つの『漱石全集』編纂を内部資料から分析することで、漱石を「学者」かつ作家として表現しようとする岩波書店や小宮豊隆の編集意図と、「学問」の香りをすら消費しようとする大衆読者の欲望との同床異夢のなかで、文豪漱石像が形成されたことを論証したい。あわせて、1920～30年代の全集編纂過程を解明することで、全集編纂に参画することで自立した研究領域として地歩を固めていった日本近代文学研究の源流に遡り、学問史を記述するための基礎を形成することに繋げたい。

## 3. 研究の方法

『漱石全集』編纂関連資料は、重量にして30kg程、ほぼ全てが手書き資料であり、未整理の膨大な書簡・紙片類を含む。保存状態は比較的良好だが、80年以上の間に鉛筆筆記部分などの退色が進んでいる。資料の状態を保存しつつ研究効率を上げるために、デジタルカメラによる写真撮影と、手書き文章をテキストデータへ入力する作業、及び目録作成を行なう。また写真データとテキストデータを連携させたデータベースを形成し、注釈を付し、全集編纂の動向が立体的に浮かび上がるようにした。

データベースの構成にあたっては文献管理のフリーソフト Tropy を使い、将来的にオンラインのデジタルコレクションとして公開する選択肢を視野に、デジタルコレクション管理ソフトウェア Omeka を用いて注釈付きのデータベースを試験的に作成した。

## 4. 研究成果

岩波書店の決定版『漱石全集』の編纂過程の資料を撮影し、翻刻・注釈を付し、データベース化することが完了した。これにより全集編纂にかかわって漱石関係資料がどのように岩波に提供され、資料が選別され、本文が決定していったのかを具体的に追うことができるようになった。今後の展望として、森田草平や小宮豊隆ら関係者の全集編纂に関する書簡を調査し、翻刻しデータベース化することで、全集編纂の動向を複数の視点から描き出していくことが望まれる。

決定版全集には、新収録の逸文の発見者であり、図版として『漱石全集』月報を彩る漱石関連物品(たとえば漱石作品が新派劇化された時の番付など)を収集した、鎌倉幸光というコレクターが大きな役割を果たしている。鎌倉は単にコレクターであるだけでなく、漱石の著作や漱石に関する著作の網羅的な目録作成を目指していた。数次にわたり発表された鎌倉による文献目録を入手・比較することで、漱石研究の最初期における書誌学的研究の成果としての意義を検討した。あわせて、不明な点の多かった鎌倉について調査を行ない、基本的な人物情報を特定することができた。

また、研究期間中に、従来現存するか不明であった夏目漱石自筆書き入れ入り『文学評論』（春陽堂、1909）校正刷りが発見され、これを購入し、日本近代文学館が所蔵する他の漱石出版物の校正刷りとの比較を行うことができた。これにより、漱石自身による『文学評論』の校正と、漱石の弟子小宮豊隆や林原耕三による校正とを比較することで、後年『漱石全集』編纂の際、表記統一の指針とされたいわゆる「漱石文法」が生まれるにいたる過程をより具体的に追うことができるようになった。

また、全集編纂において中心的な役割を担った小宮豊隆による1935年版『漱石全集』の解説、それに基づく評伝『夏目漱石』の校正ゲラを検討し、漱石の徴兵忌避をめぐる記述が初版『夏目漱石』（岩波書店、1938）にははじめから存在せず（つまり検閲対策として削ったという可能性は低く）、戦後の新書版『夏目漱石』（岩波書店、1953）で増補されていることがわかった。

このことに関連して、作家漱石についての伝記的情報を整理し、年表を作るという営為を、『漱石全集』内外にわたって調査する必要が生じた。従来漱石のプライベートな資料に接することができるのは小宮豊隆や松岡譲ら遺品にアクセスすることができる限られたメンバーにとどまり、そのなかでも『漱石全集』に資料として収録するか否かは内容によって恣意的に選別が行なわれていたことが、新書版『夏目漱石』の刊行に相前後して、小宮によって公言されるに至った。妻鏡子に関する漱石の非難めいた表現など、存命の遺族や関係者に影響を生じるものなど、さまざまデリケートな問題をふくむ記述の採録が恣意的に見送られてきたというのである。この方針が改められるとともに、各所から寄せられる新発見の資料などが順次『漱石全集』に取り込まれることで、漱石についての伝記的情報の集積・公開が進んでいく。まさにその過程で漱石の徴兵忌避に関する扱いが焦点化されることになったのだ。

『漱石全集』内外の各種の漱石年表について、北海道への戸籍移転による徴兵忌避を記述するか否か、記述するとすればどのように記述するかという観点で調査を行なった結果、増補版『漱石の思い出』（1929）に付された松岡譲作成年表から戦後の荒正人による各種の年表にいたるまで、「徴兵の関係で」戸籍を移したというあいまいな表現が繰り返され、踏襲されてきたことが明らかになった。このことは後に漱石が存命中の地方公演の様子が記された地方新聞の記事が『漱石全集』に収録されることにより、漱石自身がひた隠しにしようとしたともいえない、いわば公然の秘密であったと理解できるようになる。このように『漱石全集』の増補改訂、編集方針の変化にともなって漱石研究の実証的な側面は進展してきた。

一方、文豪漱石が国民的作家としての文豪漱石像が確立していくことで、文学と社会との関係を問う批判的視線が漱石にも注がれることとなる。実証積み重ねの成果である漱石年表は、同時に作家の倫理を問うという文芸評論の営みにもつながっていくのである。その最たる例が年表上の徴兵忌避に注目した丸谷オーによる評論「徴兵忌避者としての夏目漱石」（『展望』1969）である。自身は徴兵忌避しておきながら、作中人物には明治の精神に殉じるという問題系を突きつけるという二重基準を指摘し、国民的文豪漱石というイメージに相反する、偽善者との疑惑をつきつけるものであった。漱石を顕彰することから、批判的視線で漱石研究を相対化するという大きな方向転換がこのとき予告されていたといえる。丸谷オーに呼応して大岡昇平は「漱石と国家意識」（『世界』1973）を論じるなど、政治の時代と呼ばれた1960年代末を経て漱石像は再び変容せざるをえなかったのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 服部徹也	4. 巻 (96)
2. 論文標題 木下利玄による受講ノート 夏目漱石 『文学評論』講義の翻刻と解題(2) ダニエル・デフォー論と 写生文家のリアリズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学論藻	6. 最初と最後の頁 132 - 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服部徹也, 頼怡真・訳, 呉佩珍・監修	4. 巻 37
2. 論文標題 張我軍的夏目漱石《文學論》翻譯再考 - 《文学論》真是日本近代文學理論的起源 【口へんに馬】?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臺灣文學學報	6. 最初と最後の頁 165-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.30381/BTL.202012_(37).	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部徹也	4. 巻 95
2. 論文標題 木下利玄による受講ノート 夏目漱石 『文学評論』講義の翻刻と解題(1) ダニエル・デフォー論の刊 本未収録箇所と「草枕」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文学論藻	6. 最初と最後の頁 69-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 服部徹也
2. 発表標題 漱石 『文学評論』における「興味の加速」 木下利玄の受講ノートを視座として
3. 学会等名 慶應義塾大学文学部 第429回 国文学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部徹也
2. 発表標題 漱石のフィクション論
3. 学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高橋幸平 久保昭博 日高佳紀（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 小説のフィクショナリティ 理論で読み直す日本の文学	

1. 著者名 服部 徹也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 400
3. 書名 はじまりの漱石	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------